

教養外国語教育研究 部会報告

人文学部 荻部恒徳他

1997年度には本部会の研究発表会は2度開催された。いずれも前年度から始められた「私の外国語授業」のテーマのもとに行われたもので、日々の授業で効果を上げた工夫・試みの実践報告であり、参加者に良い刺激と明日への意欲を与えるものであった。いずれの発表会とも参加者は25、6人であったが、後の懇親会にもその多くが出席し、外国語教員同士の数少ない意見交換の場として有意義に活用された。

(荻部恒徳 記)

第6回外国語教育研究部会研究発表会

「私の外国語授業 第2回」

日時：1997年7月15日（火）16時30分より

会場：松風会館2階大会議室

発表者・演題・司会者・発表要旨：

Mr. John Naaykens (非常勤講師・英語)、

“Teaching Content Courses in English:

Psychology and Global Issues” (Presiding:

Mr. Kazuo Fukuda)

ジョン・ネイケنز氏の発表は「内容中心の英語授業——〈心理学〉および〈世界の諸問題〉」であった。氏は1997年度に新潟大学において教養科目の中の「講義英語」(Lecture in English)を担当した。その内容は「人間の発達心理」であった。この授業は教養の一般講義系科目として、または教養外国語科目として受講できるものであり、認知的発達および言語・人格・社会性・道徳の発達を扱った。これらのトピックに関する作業や活動を教室内で実施する中で、同時に学生の英語の4技能(聞く、話す、読む、書く)を伸ばす

ことを目標とした。

一方、「世界の諸問題」は、同じ1997年度に敬和学園大学において、内容中心的英語科目として実施された。この授業は、環境、食料、紛争、人口、貧困、教育、健康、家庭などの世界的諸問題に焦点をあてて、それらについて英語で考え、英語で発表するというものであった。

「人間の発達心理」と「世界の諸問題」に共通する哲学は、次のようなものである。つまり、外国語を学習することは、有意義な問題領域の研究を通してオーセンティック(authentic)なコミュニケーションのためにその言語を使用する時に、得るところがより多く、目的もより明確になる、という考え方である。教室では、様々な活動を通して学生が英語を使い、習得していけるように工夫される。たとえばペアー・ワーク、役割練習、研究発表、クイズ、ゲーム、グループ間活動等である。

内容中心的外国語授業の原理はPeaty, D. (1995) “Global Issues in the EFL Class room” in Policy Science: Special Issue: Focus on Foreign Language Education, pp.33-42において解説されている。その理論的根拠は次のようなものである。

- (1) この授業方法は、学習者が将来当該外国語を駆使する時の方法を考慮に入れている。
- (2) 学習者に関連があると判断できる内容を利用することによって、その学習意欲を増大させることができる。
- (3) この授業方法は、取り上げるトピックおよび当該外国語についての学習者の過去の知識・経験を基礎にして活用できる。
- (4) 言語は、ばらばらに切り離された文においてではなく、オーセンティックな文脈内でのその使用に焦点を当てて教えられるべきである。
- (5) 新しい言語の入力は、それが習得されるためには、まず理解されなければならない。

Peaty (1995) では、内容中心的英語授業に関して三つのタイプのプログラムが考えられている。

- (a) テーマに基づいたプログラム (theme-based program)、
- (b) シェルタード・プログラム (sheltered program)、

(c) 補助的プログラム (adjunct program) である。

この内、(a)は特定のテーマについて外国語の教師が教える授業であり、大学の英語授業などにふさわしい方法であると言われている。ネイケズ氏の敬和学園大での「世界の諸問題」はこのタイプに入る。(b)のタイプは、特定学問分野のテーマを、その分野の専門家が教えるものであり、外国語はその分野を理解する上で必要なものと位置づけられる。ネイケズ氏の新大での「人間の発達心理」はこのタイプの授業である。(c)は、学生に通常の外国語の授業と内容中心的授業の二種の授業を受けさせて、前者を後者のための補助的なものとするプログラムである。

ネイケズ氏の発表では、ビデオにより、敬和学園大で「世界の諸問題」に取り組んだ学生達の英語による研究発表の様子が紹介された(時間の関係上、新大での授業の紹介がなかったことはやや残念であった)。当然、学生たちの英語の流暢さや正確さにはかなり個人差があった。しかし、この授業は自分で調査・研究した資料に基づいて、生きた文脈の中で目的を持って英語を使用し、自分の考えを発表することに重点があり、その点で学生たちの積極的な姿勢がうかがえた。

青少年の非行問題や世界規模での環境問題が日々話題にのぼる現代において、日本語、外国語を問わず、問題意識を持ち、ものを考え、自分で調査する態度を身につけることは非常に重要であると言える。その意味でも、今回のネイケズ氏の発表は示唆に富むものであった。

(福田一雄 記)

第7回 外国語教育研究部会研究発表会

「私の外国語授業第3回」

日時：1997年12月17日(水) 16時30分

会場：松風会館2階大会議室

発表者・演題・司会者：

- (1) Mr. Michael Bradley (外国人教師・英語)、
“Encouraging Fluency in EFL Classes”
(Presiding: Mr. Hisaaki Sasagawa)
- (2) Mr. Gregory Hadley (非常勤講師・英語)、
“Encouraging Oral Communication in the
EFL Classroom” (Presiding: Mr. Kazuo

Fukuda)

- (3) Mr. Fred S. Durbin (非常勤講師・英語)、
“Tapping the Summer Heat: the Ten Day
Intensive Course, 1997” (Presiding: Mr.
Takashi Yamakage)

(1) の発表要旨：

日本人学生を教える際、特に多人数クラスでは、スピーキングは四技能の中で最も難しい。当日の発表で、氏は教室で fluency を促す方法について二つに分けて述べた。まず、“fluency activities”については学生に正確さよりも何を話したいかに重点を置くように指導する。というのは、英語の習得には意味を伝えるために英語を使用するということが最も重要であるからである。しかし、現実では初級英語の学生たちは概して英語を使って自由に話すことには消極的であり、これが一層習得を困難にしている。従って、教師は学生に興味を持たせるやり方で英語を使用させる必要がある。次に、氏はそのための五つの具体的な方法を提示した。即ち、会話、インフォメーションギャップ活動、ロールプレイ、物語を話すこと、議論である。結局、英語の習得を促進する上で、最も効果的な活動は集団で共通の目標について話し合う “convergent” activities (集中活動) であると結論づけた。

(笹川寿昭 記)

(2) の発表要旨：

新潟大学英語非常勤講師、グレゴリー・ハドリー氏の発表は「外国語としての英語授業における口頭コミュニケーションの促進」についてであった。英語授業における「授業参加」(classroom participation)の重要性がよく指摘されるが、それを促進するための方法については、具体的な提案は少ない。そこで氏は、「口頭コミュニケーションを促進し測定する方法」(Techniques That Encourage and Measure Oral Communication=TEMOC)を、三年間にわたり氏の英語授業において実践し、その結果を調査した。今回の発表はその報告である。氏が採用した TEMOC の方法とは、授業中に、単独で、ペアで、あるいはグループで task を行っている学生達が英語を使うたびに、即その場で得点札を与えるというものである。白(1点)、青(2点)、赤(3点)の札を使う。この得

点を「口頭参加得点」(oral participation points)と呼ぶ。どういふ発言に対して何点与えるかは、あらかじめ決めておく。たとえば、一語による応答なら1点。もう少し複雑な応答発言なら2点。自分の意見を述べる場合のようなさらに複雑な発言や、グループのスポークスマンを自ら志願した場合などは3点である。教師は、注意深く、首尾一貫したやり方で、学生の英語使用の内容・回数を観察し、不公平の生じないように札を与える。そして毎回の授業の最後に札の得点を合計し、学生ごとに記録しておく。これに似た方法は、主としてネイティブの教師によって、いくつかの大学で実践されている例がある。この方法で氏の授業を受けた敬和学園大学2年生169名の感想は、8割近くが「良いアイデアだ」、「英語を話す多くの機会が持てた」、「英語を話そうと努力した」など、総じて好評だった。

ハドリー氏の第一の関心は、このようなTEMOCによる学生評価が、いわゆる正式の口頭英語試験による評価とどのような関係にあるかということである。氏は、敬和学園大のTEMOCのクラスで、正式な口頭英語試験の代表的なものとしてCambridge PET and KET Testsを2回実施し、その得点合計と、TEMOCの得点合計との相関係数を調べた。その結果は+82という高い数値であった。これにより氏は、TEMOCを正式な口頭英語試験に代用できると結論づけている。

氏の第二の関心は、TEMOCが英語という言語そのものの学習を促進するかどうか、ということである。氏は、同じく敬和学園大において、二つのクラスを選び、一つはTEMOCで教える会話クラス、もう一つはTEMOCを使わない会話クラスにした。そして、両クラスにおいて、学期の最初と最後に同一内容の「クローズ・テスト」(close test=文脈をたよりに、テキスト中の多くの空欄を埋めさせるもので、総合的読解力を試すテスト)を実施して、二回のテスト間の成績の変化を比較した。結果はTEMOCを使ったクラスの方が、そうでないクラスよりも、伸び率が大きかった。これによりTEMOCが英語の学力養成にもプラスになることが示された。

氏の第三の関心は、はたしてTEMOCが文法的知

識の測定法になりうるかどうか、ということである。この調査には、新潟大学の英語I b(理学部一年向け。26名)のクラスが対象となった。半年TEMOCで教えた後で、最後に文法的知識を測定するテストを実施し、TEMOCの得点と比較した。その結果、文法テストとTEMOCとの相関係数は-20という低いものであった。氏は、結論として、TEMOCは文法的知識を測定できないとしている。

ハドリー氏の研究により、次のようなことが明らかにされた。(1)TEMOCはクラスの雰囲気活性化し、学生の授業参加を促進する。(2)TEMOCは正式の口頭英語使用能力測定試験に代えて利用できる。(3)TEMOCは英語の総合的学力養成にも資するところがある。(4)しかし、文法的知識の測定に関しては、TEMOC以外の方法によらなければならない。

(福田一雄 記)

(3) の発表要旨：

本日の演題は「学生の熱意を暑気払いとして：1997年10日間の夏期集中コース」である。

18名の熱意に燃えた一年生の英語力涵養のために、私は綿密な編成と学生中心の学習活動を計画した。

出席カードはクラスの運営に有効であった。学生一人一人用のカードは出席と評価の記録簿として使った。授業ごとに全部のカードを混ぜて切り、切ったカード順に学生を当てたので学生の話す機会は平等になった。カードを幾つかの山に仕分けることで、学生のグループ分けや、ペアにするのがスムーズにいった。当てずっぽうに指名すると学生は緊張し、クラスの他の学生と一層よく話し合うようになった。

1限目で学生は会話とリスニングを勉強した。2限目ではリーディングの宿題に基づいて議論をしたが、グループのリーダー学生たちが追加準備の責任をもった。3限目には学生たちはドラマを創作して演じた。成績評価はテスト、クイズ、及び寸劇と議論の点数に依った。

各グループはターゲット・ストラクチャー練習のために当てずっぽうの質問を入れた封筒を用いた。同じテーマについて異なった記事を含み情報ギャップ練習は成功であった。

(Fred S. Durbin 記 山影隆記)